

国

語

(一〇〇分)

(注意事項)

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
- 2 問題冊子は一冊(1頁から21頁)、解答用紙は二枚(問題一用紙と問題二用紙)あるので注意すること。
- 3 用紙の脱落や汚れに気づいた場合は、手をあげて監督者に知らせること。
- 4 試験開始直後に、各解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入すること。
- 5 解答は、すべて解答用紙の解答欄内に記入すること。

問
題
一

(100点)

(一) 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

『審判』はそれまでに何度か読んだことがあった。しかし、じっくり読むと、まるで味わいがちがった。それは俳句的な味わいと言っているいかもしれない。

たとえば、次のような一文。

鳥籠が鳥を探しに出かけていった。

(八つ折判ノート)

こういうのは、普通で読んでいると、なんだかよくわからないまま通り過ぎることになる。しかし、立ち止まってゆっくり読んでみると、さまざまに解釈できる。たとえば、私は自分がこの鳥籠のような気がした。籠から逃がしてしまった健康という鳥は、空高く舞い上がって見えなくなり、もうつかまえない。それでも鳥籠の私は、今も健康を探している。

カフカの文章は一文が長く、つるつる読もうとすると、長すぎる麺のような食べにくさがある。しかし、^①少しづつ噛めば、じつはそのひと口ひと口に、俳句的な深さと大きさがあるのだ。

読者がゆっくり読んでくれることを、じつはカフカ自身も願っていたのではないかと、私は思っている。

カフカは遺稿の焼却を遺言したように、自分の本の出版については、つねに消極的だったが、いざ出るとなると、造本にはとてもこだわった。

その中でも特徴的なのが、この指定だ。

②可能なかぎり、最大の活字でお願いします。

(出版社への手紙 一九二二年九月七日)

その結果、カフカの『観察』という最初の本は、とても大きな活字で組まれている。私は複製本を持っているが、その活字の大きさは、普通の小説の本だと思つて開くと、ちよつとぎよつとするほどだ。絵本くらい大きい。余白もたつぷりとつてある。

そんなに活字を大きくすることに何の意味があるのか？

これは実際にその本を読んでみると、すぐにわかる。さつと速く読むことができないのだ。活字が大きいせいで、どうしても一度に目に入る文字量が少ない。だから、一文の一部分ずつを、ゆっくりと読むことになる。

絵本の活字が大きいのも、子ども向けにそうなっているというだけでなく、ゆっくり読ませる効果があると思う。

カフカがねらつたのは、そういうことではないのか？

これは私の推測にすぎないが、カフカの文章はゆっくり読むと、とても味わいが増すので、なおさらそう思うのだ。

ゆっくり読むことには、本が持っている味わいを充分に感じるといふことの他に、もうひとつ意味があると思う。それは、自然と「自分の内から引き出されるもの」がある、ということだ。

本をかなり速く読んでも、その内容は十分に理解できる。笑えるところは笑えるし、泣けるところは泣ける、感動するところはちゃんと感動できる。しかし、同じ本を、速く読むよりも、ゆっくり読むほうが、ずっと面白く感じる。

それは経験的にわかっていった。でも、いったいなぜなのか？

ゆっくり読んでいるときには、その間に、本に書いてあることに触発されて、いろんなことを思い出したり、考えたりしている。本を読む面白さの半分は、じつはそういう、本に書いてないこと、自分の内から引き出されるものにあるのではないだろうか。

「読書の面白さ」＝「本に書いてあること」＋「自分の内から引き出されるもの」ということだ。

だとすれば、^③本に書いてあることを自分の内に取り込むことばかりに集中しすぎるのは、もったいない。もつと
いろんな雑念にとらわれながら、遠回りして読むほうが、じつはより充実した読書体験となるのではないか。

でも、ここで、こういう疑問を持つ人もいるかもしれない。

本に書いてあることで、自分がまだ知らないことは、それを知ることには価値がある。しかし、自分の内にあるものを引き出してみても、それはすでに自分の内にあるのだから、価値がないのではないか？

たしかに、財宝のように考えればそうだろう。外から家に財宝を持って帰れば豊かになるが、自分の家の財宝をあらためて取り出してみても、何も増えない。

でも、カフカはこう言っている。

自分の城の中にある、自分でもまだ知らない広間。

それを開く鍵のような働きが、多くの本にはある。

(オスカー・ポラックへの手紙 一九〇三年十一月九日)

そこが人間の不思議なところで、自分の内に、まだ自分でも知らない広間がある。本は鍵となって、その広間の扉を開いてくれる。

それに、すでに知っていることでも、あらためて思い出すことで、別の見方に気づいたり、AとBを同時に思い出したことで、二つが触発し合って、「解剖台の上でのミシンと傘の偶然の出会いのように美しい」ことが起きるかもしれない。

だから、^④すでに自分の内にあるものでも、油断はならない。

そこで、実際にそれをやってみようと思うのだ。

文学をすぐくゆつくり読み、その間にわいてくるさまざまな思いや考えを、くだらない雑念まで含めて、決して振り払わずに、わいてくるままにまかせてみる。普段ならしないような逸脱をし、あえてわき道にそれ、遠回りをし、ときには道に迷いながら読む。

私個人の雑念は、他の人には無意味ではあるが、それでもその逸脱自体が、他の人の想念の逸脱を誘うことにもなるだろう。

ゆつくりと読む私の様子をながめながら、みなさんもそれぞれに、自分の内にさまざまな思いがわいてくるままにまかせてみてもらいたい。

そのことに価値があるかどうかは、あなたの「自分でもまだ知らない広間」の扉が開くか次第だ。

(頭木弘樹「なぜ「すぐくゆつくり」なのか？」による)

問1 傍線部①「少しずつ噛めば」とあるが、「少しずつ噛むとはどういうことか。説明しなさい。

問2 傍線部②「可能なかぎり、最大の活字でお願いします」とあるが、カフカがこの指定をした意図はどのようなものだと考えられるか。説明しなさい。

問3 傍線部③「本に書いてあることを自分の内に取り込むことばかりに集中しすぎるのは、もったいない」とあるが、なぜか。説明しなさい。

問4 傍線部④「すでに自分の内にあるものでも、油断はならない」とはどういうことか。説明しなさい。

(二) 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

子どもの頃、よく空を眺めた。雲を眺めていたのか。ある時、休み時間に、澄みきった秋の青空を眺めていたら、隣に来た友人が、つぶやくように、「地球は青かった」と言った。そういうことかという思いと、そうじゃないだろうという思いが一緒になって、とても嬉^{うれ}しかった。彼はあの青い空をそっくりそのまま吸い込んでいたのだろう。

① 言葉の「意味」はどうでもよかった。一緒に空を吸い込んでくれる人がいると感じて嬉しかったのかもしれない。

夕暮れはいつも少し寂しかった。そのかわり、空に星がきらめきはじめるのは嬉しかった。いつも同じ位置に出てくるわけではないから、見つけるのが難しい。たいていは偶然に発見して、少し得意な気持ちになった。星はどこから来るのかと考えたことはなかった。

昼間も、星は、空にいる。誰からもそんな話を聞いたことはなかった。ただ初めてそう聞いたとき、知ってるよ、と思った。そして、自分だけの秘密が外に知られてしまったような、気恥ずかしい思いがした。

昼間も、空には、星がきらめいている。ただ、星たちのか細い光は、太陽のまぶしい光に埋もれてしまう。星のほのかな光は、私たちの目には届かない。

まぶしい光が沈むと、その光が現れてくる。今まで埋もれていた星の光が姿を現わす。最初は、うっすらと、やっと見える程度に。そのうち、目が慣れてくるのか、少しずつ輝きが増す。その薄明^{トワイライト}かりが、子どもの目にも、何か特別な時間と映っていたのだろうか。

かなり大きくなってから、初めて野宿をしたとき、日の出前の星を見た。次第に明るくなってゆく空の中に、星たちが少しずつ光を小さくしてゆく。そして、音もなく静かに消えてゆく。朝が来た。ということは、星たちが消えてゆく。そういうことだったのか。

② 表と裏が合わさったような感じがした。驚きでも感激でもない。しいて言葉にす

れば、諦めに近い納得のような感覚。

金子みすゞは歌っていた。「昼のお星はめにみえぬ。見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ」(「星とたんぼぼ」)。

大漁の歌も心に残る。「朝焼け小焼けが大漁だ。オオバいわしの大漁だ。浜は祭りのようだけど、海の中では何万の、いわしの弔いするだろう」(「大漁」)。

人間にとつては祝いでも、イワシにとつては弔いになる。だからといって、水を差すわけではない。大漁は嬉しい。祭りは楽しい。でもどこかで、イワシの弔いを憶おぼえておく。だからといって、どうすることもできないのだけど。^③そういうことだ、と憶えておく。

散歩好きは父から受け継いだ。子どもの頃も、たくさん一緒に散歩してもらった。後年、父と散歩する時にはいつも懐かしさが伴っていた。

散歩は「ウォーキング」とは違う。「効率的なウォーキング」は話題になっても、「効率的な散歩」という話は聞かない。散歩は、とりとめもなく、ぶらぶら歩く。そうしていると、花の香りがする。鳥の声が聞こえる。感覚器官が働き出す。

一人の場合は、文字通り、気ままである。適度に情景が移り変わってゆくのがよいのだろう。「考えている」ようでもあれば、ただ思いが現れては消えてゆくだけのようない気もする。誰かと一緒の場合は、言葉を交わす。しかし喫茶店で話をするのとは違う。向かい合って座るのではない。一緒に同じ方向を向いて歩く。しかし目的地を目指して急ぐのとも違う。一緒に歩くことそれ自体が目的であるとも言えるのだろうが、「目的」という言葉は、どうも散歩には馴染なじまない。こうした感覚を「心地よい」と感じてくれる人と一緒に散歩するのは、本当に楽しい。

『センス・オブ・ワンダー』という本の中に似た話が出てくる。人間の手による環境汚染をいち早く警告したレイチェル・カーソン。生涯独身の、もの静かな婦人の遺作となったこの随想は、姪めいの息子である幼いロジャーと一緒にメイ
ン州の森や海辺を歩き、星空のもとにたたずんだ「散歩」の記録である。

あるいは、これは、何かを「した」記録ではなくて、^④「しなかった」ことの記録である。海辺を歩き、小さな発見があり、ささやかな驚きがある。そうした出来事を記録しながら、この本は、私たちに「しない」ことを伝える。「する」のでなく「しない」。しないでいると、森が語りかけてくる。海が、あちらから、現れてくる。そうした表現がたびたび出てくる。

わたしたちは、(……) 夜も昼も探検にでかけていきます。それは、何かを教えるためではなく、いつしよに楽しむためなのです。

わたしたちは、いつも森に散歩に出かけます。そんなときわたしは、動物や植物の名前を意識的に教えたり説明したりしません。ただ、わたしはなにかおもしろいものを見つけたたびに、無意識のうちによるこびの声をあげるので、彼もいつのまにかいろいろなものに注意をむけるようになっていきます。

(『センス・オブ・ワンダー』上遠恵子訳、ゆうがく 佑学社、一九九一年)

目を閉じる、耳を澄ます。すると、鳥たちの声が聴こえてくる。そして、いつの間にか注意を向けるようになる。そうした時の身体感覚を、この本は「センス・オブ・ワンダー」と呼ぶ。

好奇心にも似ているが、それはとても繊細である。「する」を少なくしてゆく。虫を捕まえて研究するのではない。

じつとそのまま観^みている。凶鑑を調べて知識を増やすのではない。不思議なことを不思議なまま、からだの内側に滲^しみ込ませてゆく。

アクティブではない。パッシブである。しかしこのパッシブは不活発ではない。むしろその時こそセンス・オブ・ワンダーが働きだす。日が沈むと夜空の星がきらめき出すように、アクティブが静まると^⑤パッシブな感性が働き出す。

エーリツヒ・フロムが、「持つ to have」と「ある to be」の違いを語るに際して、詩人テニソンと俳人芭蕉^{ばしやう}を対比している。どちらも散歩中に目にした可憐^{かれん}な花の詩。テニソンは、その花を「根ごと、摘み取り、手に取って」、「お前のすべてを知ることができたら」と詠^{うた}う。フロムによれば、それは「生き物をバラバラにして真実を求める西洋の科学者」の視点である。それに対して、芭蕉の句は、「よく見れば ならずな花咲く 垣根かな」。「芭蕉は花を摘むことを望まない。手を触れさせたくない。彼がすることはただ、それを〈見る〉ために〈目を凝らす〉ことだけである」(『生きるということ』佐野哲郎訳、紀伊国屋書店、一九七七年)。

テニソンが花を知るために花の命を奪ってしまうのに対して、芭蕉は生きたままの花と一緒にいる。センス・オブ・ワンダーもそれに近い。所有するのでも、自分のものにするのでもない。共にいる、一体となる。あるいは、「しない」でいると、あちら側から現われてくる。そこに目を留める。

本当は(「昼間の空の星」を思い出してみれば)、アクティブな時も、この繊細な感性は働いているのだろう。しかし私たちの耳には届かない。アクティブな強い刺激の中では、このパッシブで繊細な感性は、私たちには聴こえない。この本はそうした「センス」を私たちに思い起させたことになる。

そして、もうひとつ、この本は、そうしたセンスを「伝える」とはどういうことか、私たちに考える機会を与えてくれた。私たちは、ごく自然に、この幼いロジャーの内側にもこの「センス・オブ・ワンダー」が育ってゆくのである。

うと予感する。では、カーソンは、それをどうやって「教えた」のか。この物静かな婦人は、本当に散歩が好きだったようである。散歩するのが楽しくてしかたがなかった。教えるために散歩したのではない。一緒に散歩したかった。幼い甥おいと楽しい時間を一緒に過ごしたかった。

おそらく「センス・オブ・ワンダー」^⑥は、伝えようとする、伝わらない。では、伝えなければそれでよいのかと問われると、困ってしまうのだが、少なくとも、一生懸命には伝えようとしない。あるいは、伝えることを目的としない。

そう思ってみれば、「センス・オブ・ワンダーを育てるために散歩する」という発想は、幾重にも、滑稽である。そんな散歩は楽しくない。センス・オブ・ワンダーも育たない。そこで育つ感性はセンス・オブ・ワンダーとは似て非なるもの、むしろ、似ているだけ危険かもしれない。そうした発想はいずれ「センス・オブ・ワンダーがどれだけ育ったか」、その成果を測定し始める。そしてその効率的な育成プログラムを開発しようとする。

そんなことをしたら、散歩が、散歩ではなくなってしまうのに。

(西平直「散歩の中で」による)

問1 傍線部①「言葉の「意味」はいつでもよかった」とあるが、なぜか。説明しなさい。

問2 傍線部②「表と裏が合わさったような感じ」とはどういうことか。説明しなさい。

問3 傍線部③「そういうこと」とはどういうことか。説明しなさい。

問4 傍線部④「しなかった」ことの記録」とはどういうことか。説明しなさい。

問5 傍線部⑤「パッシブな感性」とはどういうことか。説明しなさい。

問6 傍線部⑥「センス・オブ・ワンダー」は、伝えようとする、伝わらない」とあるが、なぜか。説明しなさい。

問
題
二

(100点)

次の文章は御伽草子『さいき』の一節である。本文は、京にいるある女から豊前国の佐伯の屋敷に手紙が届いたところから始まる。これを読んで後の問いに答えなさい。

「海人の見る目も恥づかしや、急ぎ煙となしたまへ」とて、奥に歌あり。

見るたびに心尽くしのかみなればうさにぞ返すもとの社へ ……A

と書かれたり。佐伯下りのときかたみとてひとふさ切りて置きつる 鬢の髪を、巻き添へてあり。

うちの女房、これを見て、あらうつくしや、おもしろや、かかる優なる女房を呼ばでは、いかがあるべきぞ、かほ

ど不得心なる男に、かくともの言はば、いかがあるべき、たばかりごとを言ひてみんと思ひて、佐伯、鷹野より帰

りけるに、女房言ふやうは、「みづからが妹、都に、人にたのめられてこのほど候ひしが、夫の心のうたてさは、

とある女に思ひつき、暇を出して候ふほどに、万事たのみて下り候はんと、文をことつて下し候へば、迎ひを

上せてたび候へ」と言ひければ、「やすきほどのことなり」とて、「急ぎ迎ひを上すべき」と言ひて、やがて言ひつ

けて、人を上せんとありしかば、その時、この女房は、空病みをして、「文を書き得ず候ふ。殿に一筆あそばして

御やり候へ」と言ひければ、「ともかくも」とて書かれけり。「久しく御おとづれも申し候はで、心よりほかに候ふと

ころに、御文たまはり、うち置きがたく、御うれしくながめ入り候ふ。すなはち御迎ひ参らせ候ふまま、急ぎ御下り

候ふべく候ふ。くはしくは、とても御みづからにて」と書かせたり。

さるほどに、ほどなく迎ひは京へ上り着きけり。その間に、うつくしく御所を建て、待たれけり。京には、うれし

く思ひて、やがて下られけるあひだ、ほどなく豊前国に着きたまへり。御下りとして、おのおのひしめき、やがて新造

へ入れたてまつりて、女房出であひて、あらいつくしの女房や、李夫人、楊貴妃、衣通姫、小野小町と聞き伝へしも、

これにはいかでまさるべき、われさへ、見ればあまりのうつくしさに立ち処もさらにおぼえず、かほどうつくしき

人をさへ、言ひ出すこともなし、^キまして、わらはがこととは、年月長々の在京に、一度も思ひ出すまじ、かほど不得心なる男をたのみしわれこそあさましけれとて、髪剃り^そ落とし出家せんとただひとすぢに思ひ定めし女房の心のうちこそやさしけれ。かくて、夫に言ふやうは、「これまで、京のまれ人^{注11}を呼び下して候ふうへは、急ぎ御見参候へかし」と言ひければ、すなはち新造へぞ移りける。そのあとに、女房は、髪を切り、文に添へ置き、やがて家をぞ出でにける。

京の女房、このよしを聞き、やさしやな、高きもいやしきもねたむならひの候ふに、かやうにやさしき人を、いかでか一人置くべきぞ、佐伯にふたたび見参して、過ぎにし恋を^{注12}はれつるも、ひとへにかの本妻のなさけの深きゆゑなれば、ともに出家せんとて、やがて髪切り捨てて、同じ庵室^{あんじつ}に閉ぢこもり、おこなひ澄まして^ケあたりけり。

佐伯は二人の女房に捨てられて、あるにかひなき身のほどとて、^{もとどり}髻切りて、西へ投げ、高野山へぞ上りける。

(『さいき』より)

注1 奥…手紙の最後。 注2 鬢…耳のそばの髪。 注3 うち…家。 注4 女房…女。婦人。 注5 不得心…不心得である

こと。 注6 鷹野…鷹狩り。飼いならした鷹を放つて鳥などを狩る獵。 注7 女…女。 注8 たび…「たまひ」に同じ。 注

9 殿に…あなた様のほうで。 注10 新造…新しく作った御所。 注11 まれ人…客人。 注12 はれつる…わだかまりを晴ら

すことができた。

問1 二重傍線部「たのみしわれこそあさましけれ」を解答欄に書き写し、例にならって品詞分解しなさい。

【例】

形容動詞・ 連用形	名詞	助詞	動詞・ 未然形	助動詞・尊敬・ 連用形	補助動詞・ 終止形	助動詞・推量・連体形 (撥音便無表記)	助動詞・伝聞・ 連体形	助詞
にはかに	宮	へ	渡ら	せ	たまふ	べか	なる	を

問2 傍線部ア「うたてさ」、ウ「やすき」、オ「文を書き得ず候ふ」、カ「さらにおほえず」、ケ「おこなひ澄まして」をそれぞれ現代語訳しなさい。

問3 Aの歌の「尽くし」は「筑紫」との掛詞、「うさ」は豊前国にある宇佐八幡宮の「宇佐」と「憂さ」の掛詞である。この歌にある掛詞をもう一箇所みつけだし、何と何の語が掛けられているかを説明しなさい。

問4 傍線部イ「万事たのみて下り候はん」、ク「いかでか一人置くべきぞ」を分かりやすく現代語訳しなさい。

問5 傍線部エ「空病みをして」とあるが、なぜそのようなふりをしたのか。説明しなさい。

問6 傍線部キ「まして、わらはがこととは、年月長々の在京に、一度も思ひ出すまじ」とあるが、どういうことか。説明しなさい。

